

個と集団

— エマスの「自己信頼」 —

持 留 浩 二

〔抄録〕

アメリカの思想家ラルフ・ウォルドー・エマスの「自己信頼」を通して、個と集団との関係について論じている。まず「自己信頼」の内容を吟味し、エマスの個と集団に関する考えを明らかにしている。さらに、エマスによると、そこには宗教的な基盤が不可欠となるので、主に「自己信頼」の中における宗教的な思想へも考察を深めている。そして最後に、現代におけるエマスの自己信頼の意味合いについて論じている。エマスが感じた同時代人の心の弱さや決して埋めることのできない空虚感は現代人の多くの心の中にも見て取れそうである。そしてそれは現代人に自己信頼の態度が欠けてしまっていることを意味していると同時に、個が集団に埋没してしまっていることをも意味している。現代において、我々はもっと個の重さを考え直してもいいのではないだろうか。

キーワード：内なる神、個、集団、自己信頼

I

十九世紀アメリカの思想家ラルフ・ウォルドー・エマス（Ralph Waldo Emerson）の一八三二年の十月九日の日記に次のような詩が書かれている。

I will not live out of me
I will not see with others' eyes
My good is good, my evil is ill
I would be free--I cannot be
While I take things as others please to rate them

I dare attempt to lay out my own road
That which myself delights in shall be Good
That which I do not want,--indifferent,
That which I hate is Bad. That's flat
Henceforth, please God, forever I forego
The yoke of men's opinions. I will be
Lighthearted as a bird & live with God.
I find him in the bottom of my heart
I hear continually his Voice therein
And books, & priests, & worlds, I less esteem
Who says the heart's a blind guide? It is not.
My heart did never counsel me to sin
I wonder where it got its wisdom
For in the darkest maze amid the sweetest baits
Or Amid horrid dangers never once
Did that gentle Angel fail of his oracle
The little needle always knows the north
The little bird remembereth his note
And this wise Seer never errs
I never taught it what it teaches me
I only follow when I act aright.
Whence then did this Omniscient Spirit come?
From God it came. It is the Deity.⁽¹⁾

この詩には以下のことが書かれている。まず、何よりも個に絶対的な価値を置くこと。なぜなら人間は自らの内部にこそ神を持っているからである。そして、その「内なる神」は完全な存在であって、決して誤りを犯すことはないということである。この詩は、そっくりそのままエマスの自己信頼の考え方を見事に言い表している。この論文で私は「自己信頼」(“Self-Reliance”)というエッセイについて論じようと思うのであるが、この詩は彼の思想を理解する上で一つの助けになるだろう。

また、「自己信頼」の最後のほうに次のような一節がある。

Let a Stoic open the resources of man and tell men they are not leaving willows, but can
and must detach themselves; that with the exercise of self-trust, new powers shall appear;

that a man is the word made flesh, born to shed healing to the nations; that he should be ashamed of our compassion, and that the moment he acts from himself, tossing the laws, the books, idolatries and customs out of the window, we pity him no more but thank and revere him; --and that teacher shall restore the life of man to splendor and make his name dear to all history.⁽²⁾

ここでエマソンは自己信頼の生き方を実践すれば人は神のロゴスが受肉した存在であることが分かるのだと主張しているが、このことから、彼の自己信頼という考え方がただ単に「自信を持って生きる」という人生における一般的な人のあり方ではなく、宗教的な理念と結びついたものであることが分かる。つまりエマソンにとって、神と離れた自己信頼はあり得ないし、自己信頼と離れた神もまたあり得ないのである。このことは、現代人が抱えている様々な心の問題を考える上で、非常に大切な視点を与えてくれるのではないと思われる。「自己信頼」の中でエマソンが主張している自己信頼という考え方を考察し、さらにその考え方を通して現代人の心のあり方へと考察を広げてみたい。

II

「自己信頼」における最も大きなテーマは、おそらく、個と集団がいかなる関係にあるべきなのかというテーマだと考えられる。そしてエマソンは個に絶対的な価値を置くことを強く主張する。下の「自己信頼」からの引用箇所でもエマソンは個に絶対的な価値を認め、そういう態度がとれない人々を批判的な目で見ている。

To believe your own thought, to believe that what is true for you in your private heart is true for all men,--that is genius.... Yet he dismisses without notice his thought, because it is his.⁽³⁾

エマソンの自己信頼という信念は、上でも述べたように、宗教的なレベルから出てきたものである。そしてその最も根底にあるのが「内なる神」という考えであると言える。このことは次の引用箇所からもよく分かるだろう。

We but half express ourselves, and are ashamed of that divine idea which each of us represents. It may be safely trusted as proportionate and of good issues, so it be faithfully imparted, but God will not have his work made manifest by cowards. A man is relieved and gay when he has put his heart into his work and done his best; but what he has said or

done otherwise shall give him no peace. It is a deliverance which does not deliver. In the attempt his genius deserts him; no muse befriends; no invention, no hope.

Trust thyself: every heart vibrates to that iron string. Accept the place the divine providence has found for you, the society of your contemporaries, the connection of events. Great men have always done so, and confided themselves childlike to the genius of their age, betraying their perception that the absolutely trustworthy was seated at their heart, working through their hands, predominating in all their being⁽⁴⁾.

最初のパラグラフでエマソンは、人が自分に絶対的な価値を置かないことの弊害を述べている。「内なる神」という考え方はエマソンが強く信じるところであるが、そういう考え方を持つことを人々が恥ずかしがっていることを批判し、そんな人々は早々と「守護神」に見捨てられ、そのうちに「創意も起こらず、希望も湧かない」ようになるのだと恐ろしい指摘をしている。

そして二番目のパラグラフでは「内なる神」という考え方が述べられている。この考え方はエマソンのとる唯心論の立場から導き出されたものであろう。そしてそれはまた、なぜ我々が我々をとりまく周りの世界よりも個に価値を置くべきなのかという理由でもある。つまり神が己の内部に存在しているがゆえに、我々は個に絶対的な価値を置くべきなのである。

しかしながら、エマソンが言うように、自己信頼の態度を維持して生きていくことはそう容易いことではない。

But the man is as it were clapped into jail by his consciousness. As soon as he has once acted or spoken with *éclat* he is a committed person, watched by the sympathy or the hatred of hundreds, whose affections must now enter into his account⁽⁵⁾.

ここではエマソンは具体的な例を挙げて、自己信頼することの難しさを指摘している。そしてエマソンはつづいて、大人になってもなお「全ての誓約を退け、一度跳めてしまった後も、再び以前と同じように、気取ることなく、偏見もなく、買収されることもなく、恐れることもない無垢な目でものを見ることのできる人間は間違いなく並外れた人間である⁽⁶⁾」と言っている。

人間は、社会の中で生きていくと、常に、社会が自分に求める役割と、自分自身の本当の姿の間で、多かれ少なかれある種の葛藤を感じるものである。社会が自分に求める役割ばかりを重視すると、人は自分がある一定の役を演じる俳優でしかなく、自分の心の中に生き生きとした生命力を感じることが出来なくなってしまう。また逆に、自分自身の本当の姿ばかりを重視すると、社会との軋轢がますます深まり、孤立した状況の中で客観的な自分を見失う危険がつ

きまとうことになる。

個と集団の本来的なあり方ということを考えたとき、もともと個と集団とは相補的に機能する関係にあるべきものであったはずである。なのにエマスンには、「どこの社会も、その社会に属する一人一人の人間らしさを共謀して妨害するものである」⁽⁷⁾と信じられたのである。それゆえ「人間であろうとする者は、絶対に順応してはならない」⁽⁸⁾わけである。これはおそらく、当時の社会において個人が余りにもひどく抑圧されていたのをエマスンが痛切に感じ取っていたことを意味するものであろう。

では人間は社会の中にあつていかに生きるべきなのであろうか。

It is easy in the world to live after the world's opinion; it is easy in solitude to live after our own; but the great man is he who in the midst of the crowd keeps with perfect sweetness the independence of solitude.

The objection to conforming to usages that have become dead to you is that it scatters your force.... But do your work, and I shall know you. Do your work, and you shall reinforce yourself. A man must consider what a blindman's-buff is this game of conformity⁽⁹⁾.

まず最初のパラグラフは集団における個の理想的な立場を説明している。さらに自己信頼することにより「きっと君は君自身を強化する」であろうと言っている。逆にそれが出来なければ、人は弱体化する一方なのである。

個と集団との関わりに関してもう少し考えてみたい。一八三二年十月十四日のエマスンの日記に次のような箇所がある。

Chardon St. Oct. 14, 1832. The great difficulty is that men do not think enough of themselves, do not consider what it is that they are sacrificing, when they follow in a herd, or when they cater for their establishment....

Would it not be the text of a useful discourse to Young men, *that, every men must learn in a different way?* How much is lost by imitation. Our best friends may be our worst enemies. A man should learn to detect & foster that gleam of light which flashes across his mind from within far more than the lustre of whole firmament without⁰⁰.

上の引用箇所の中でのエマスンの言葉、「俗衆に迎合するとき、自分が何を犠牲にしているか」ということについて考えてみたい。人は俗衆に迎合することにより、一体何を犠牲にしているのだろうか。人は俗衆に迎合することによって、順応の代償に自尊心を失っているのではないだろうか。そして、その犠牲は多くの人が考えるほどちっぽけなものではないのであ

る。自己信頼を堅く持ち続けるためには、自分という人間は自分にとって尊敬に値する存在でなければならない。自尊心を持たない人間が自己信頼の態度を維持することが出来るとは考えられない。

集団よりも個に絶対的な価値を置こうとする今まで見てきたエマスの指摘は全て真の自由を求める叫びである。彼が必死になって真の自由を得ようとするのは、それが自己信頼にとって欠かすことの出来ない一要素に他ならないからである。次の引用箇所もそんな彼の叫びの一つである。

The other terror that scares us from self-trust is our consistency; a reverence for our past act or word because the eyes of others have no other data for computing our orbit than our past acts, and we are loth to disappoint them.

... Suppose you should contradict yourself; what then? It seems to be a rule of wisdom never to rely on your memory alone, scarcely even in acts of pure memory, but to bring the past for judgment into the thousand-eyed present, and live ever in a new day ⁽¹⁾.

これまでは集団からの自由を主張し、絶対的な個への価値を説いてきていたのであるが、今度はここで、自らの過去からの自由を説きはじめている。さらに続いて彼は、教義からの自由、そして論理からの自由へと論を進めている。やはり真の自由は自己信頼を実践する上で欠かすことの出来ないものなのであろう。

さらに「自己信頼」において、エマスは自立の必要性も強調している。これは今述べた彼の真の自由への希求と関連していると言っていいと思われる。なぜなら自由は常に義務を伴うものであるが、その義務こそが自立の義務とも言えるものだからである。自由を主張するものは責任を負わねばならない。自らの自由の行使によって自分が招いた結果には、自らが責任をとらねばならない。その心構えこそが自立を可能にするのである。この問題に関して次の引用箇所に注目してみたい。

But now we are a mob. Man does not stand in awe of man, nor is his genius admonished to stay at home, to put itself in communication with the internal ocean, but it goes abroad to beg a cup of water of the urns of other men. We must go alone ⁽²⁾.

他人や周りの世界に頼らずに、自らのみを拠り所とする生き方をするためには自立が必要である。我々はまず自立しなければならない。当然のことであるが、自立しなければ、他人に頼ることなく自らに揺るがぬ信頼を置くこともできないであろう。さらにエマスは「不満とは自己信頼の欠如であり、それは意志が弱っているということだ……幸運の秘訣は自らの手中に

ある喜びにこそある。常に神々や人々から歓迎されるのは独立独行⁰³の人だ」と言い、その主張を繰り返している。

次に、自己信頼の最も根底にある「内なる神」という考えについて考察してみたい。この考えはエマスのエッセイの様々な箇所に見ることが出来る。それほどにしばしば彼はこの主張を繰り返しているのであるが、ここでは「自己信頼」の中に出てくる描写に注目してみたいと思う。まず次の引用箇所に注目したい。

I remember an answer which when quite young I was prompted to make to a valued adviser who was wont to importune me with the dear old doctrines of the church. On my saying, "What have I to do with the sacredness of traditions, if I live wholly from within?" my friend suggested,—"But these impulses may be from below, not from above." I replied, "They do not seem to me to be such; but if I am the Devil's child, I will live then from the Devil." No law can be sacred to me but that of my nature. Good and bad are but names very readily transferable to that or this; the only right is what is after my constitution; the only wrong what is against it⁰⁴.

ここでもエマスは個に絶対的な価値を置くことをしつこく繰り返し、さらにその考えが唯心論の立場から導き出されているということが窺える。そして、この引用箇所の中の「善や悪はただの名目に過ぎず、容易にくるくるどちらにでも移し変えることが出来る」という言葉からは、ここでエマスは「内なる神」に重点を置き、精神における意識レベルの働きにはあまり注意を払っていないことが分かる。このことについてはあとの箇所にも出てくるので、そこで詳しく論じたい。

さらにここでエマスが言っている「私の本性の法則」とは彼がよく言う「道德感情」("the moral nature") のようなものであらうと思われるが、それに関してエマスは次のような指摘を行っている。

What is the aboriginal Self, on which a universal reliance may be grounded? What is the nature and power of that science-baffling star, without parallax, without calculable elements, which shoots a ray of beauty even into trivial and impure actions, if the least mark of independence appear? The inquiry leads us to that source, at once the essence of genius, of virtue, and of life, which we call Spontaneity or Instinct. We denote this primary wisdom as Intuition, whilst all later teachings are tuition. In that deep force, the last fact behind which analysis cannot go, all things find their common origin.... We first share the life by which things exist and afterwards see them as appearances in nature and forget that we

have shared their cause. Here is the fountain of action and of thought. Here are the lungs of that inspiration which giveth man wisdom and which cannot be denied without impiety and atheism. We lie in the lap of immense intelligence, which makes us receivers of its truth and organs of its activity.... Every man discriminates between the voluntary acts of his mind and his involuntary perceptions, and knows that to his involuntary perceptions a perfect faith is due. He may err in the expression of them, but he knows that these things are so, like day and night, not to be disputed. My wilful actions and acquisitions are but roving; the idlest reverie, the faintest native emotion, command my curiosity and respect .

ここには「内なる神」の性質がよく描かれている。エマスンによると、人間は誰しもこのような神を自らの内に持っているのである。あるいは神が人間を所有していると言うほうがより正確かも知れない。というのも、それは上の引用箇所の中でエマスンが言うように「ものを存在させている命」だからである。そしてその「内なる神」と理想的な関係を築くことが出来れば、人は「内なる神」の声を聞き、神に近づくことが出来る。そして自己信頼の態度こそがその理想的な関係を築くための鍵となるのである。しかし、もし自分の「内なる神」を信じる勇氣を持つことが出来なければ、「内なる神」とは断絶してしまうことになる。

さらに上の引用箇所の最後のほうでエマスは「意図的な心の働き」(“the voluntary acts of his mind”)と「無意識的な知覚」(“his involuntary perceptions”)とを区別しているが、そこで「無意識的な知覚」の価値をかなり大きく評価している。このエッセイはそもそも自己信頼の態度の重要性を述べるのがその主旨であるので、個にかなり大きな価値を置くことに論点が絞られている。そしてその個の価値の根拠として「内なる神」という考え方が重要になるのも無理はないだろう。さらに心理学、特にユング心理学の考え方に従えば、その「内なる神」が無意識に根ざしているということもよく理解できる。しかしながら、ここでもエマスは少しばかり意識の働きを軽視しすぎてはいないだろうか。上の引用にあった「無意識の知覚のほうを全面的に信用しなければならぬ」という言葉や「私が故意に行うことや身につけようとするものはただの根無し草にすぎない」という言葉からは、ここでのエマスの主張が少しばかりバランスに欠けているのではないだろうかといった印象が拭えない。

心理学の考え方によれば、意識と無意識は相補的に機能してはいるが、その力関係で言うと無意識の力のほうが圧倒的に強い。いや決定的な力は無意識にあると言ってもいい。上の引用からエマスンもそのことに気付いていたのではないと思われる。しかしここでのエマスの無意識への傾倒はあまりに急激すぎやしないだろうか。この描写からは、意識が無意識へと埋没してしまっているイメージが感じられる。しかしながら、よくよく考えてみると、そのような意識の無意識への埋没は本当に理想的な二者の関係とは言えないはずである。なぜなら、もし一方的な埋没が正しいとするならば、意識はその存在意義を失ってしまう。そうではなく、

意識には明確な存在意義があると考えerほうが自然なのである。あくまで意識と無意識は相補的に機能すべきである。先程も言ったように、このエッセイの主題が集団よりも個に価値を置くことの重要性を述べたものなので、このあたりがあまり強調されないのも無理はないのかも知れない。にもかかわらず、私には「自己信頼」においては、あまりに意識の価値が過小評価されているのではないかという思いがしてならない。

この点についてもう少し考察してみたい。

And truly it demands something godlike in him who has cast off the common motives of humanity and has ventured to trust himself for a taskmaster. High be his heart, faithful his will, clear his sight, that he may in good earnest be doctrine, society, law, to himself, that a simple purpose may be to him as strong as iron necessity is to others!

If any man consider the present aspects of what is called by distinction *society*, he will see the need of these ethics. The sinew and heart of man seem to be drawn out, and we are become timorous, desponding whimperers. We are afraid of truth, afraid of fortune, afraid of death, and afraid of each other. Our age yields no great and perfect persons .

ここでもエマソンは今まで通り、個に価値を置く生き方を説いているわけであるが、ここで注目すべきなのはそのための「道徳原理」(“ethics”)の必要性への言及である。私には自己信頼の考え方をすすめていけば道徳原理が是非必要になり、従って善悪の判断基準の確立なども不可欠になるのではないかと思われるのであるが、エマソンは「自己信頼」においてそういう道徳原理についてはあまり言及していない。しかしここでは明確に道徳原理の必要性を説いているのである。

そこで自己信頼と神という問題に、善悪の問題がどう関わってくるのかについて考えてみたい。この論文の最初に引用した日記の中で書かれた詩の中でエマソンは「私の善は善であり、私の悪は悪なのだ」ということを言っていた。これはつまり、自らの善悪の基準を信用し、他人の基準に頼ってはならないという自己信頼の考え方であろう。つまり、自己信頼を自分の信念として生きるには、自分をまるで神のように権威を持った存在としなければならない。そしてあくまで自分の基準に忠実であるためには、自分の中に自らの行動を決定する際に必要な明確な基準、つまり道徳原理のようなものが必要になってくるのである。そしてそれは自分が自ら信頼するに足る、極めて説得力に富むものでなければならない。そうすることにより、他人に頼ることなく自立することが可能となるのである。繰り返すようであるが、エマソンの考え方を推し進めていけば、自己信頼の実践のためには、自ら信頼することの出来る道徳原理の確立が不可欠となるのではないだろうか。

にもかかわらずエマソンは先程の引用の箇所で意識の価値をかなり低く評価していた。も

し、自己信頼の実現のための道德原理の必要性を彼が感じていたのであるならば、もっと意識の役割を重要視してもいいのではないだろうか。明確な道德原理などは高度な意識によって形成されるものだからである。やはりそのあたりがこのエッセイの弱い部分ではないかという気がしてならない。

最後にエマソンは非常にわかりやすく理想的な人間像を描写してくれている。こういう単純明快さは常に人の心を打つものである。

A sturdy lad from New Hampshire or Vermont, who in turn tries all the professions, who *teams it, farms it, peddles*, keeps a school, preaches, edits a newspaper, goes to Congress, buys a township, and so forth, in successive years, and always like a cat falls on his feet, is worth a hundred of these city dolls. He walks abreast with his days and feels no shame in not 'studying a profession,' for he does not postpone his life, but lives already .

これはすばらしい理想的人間像であると言える。ここには、過去や教義や習慣や集団といった全ての束縛から解き放たれた「今を生きる」若者の姿が描かれている。この若者は先程言及した自分だけの道德原理を持った自己信頼の人間である。

しかしながら、自己信頼を続けていくことには様々な困難が伴う。「人が強くなり、勝利者となるのが私に分かるのは、彼が全ての外部の助けを捨ててしまっ⁰⁸て一人立ちするときに限られる」という、同じく「自己信頼」の中でのエマソンの主張はもっともに思われるが、その言葉に続く「人は彼の掲げる旗印に新しい仲間が加わるたび⁰⁹に弱くなる」という指摘もまたもっともに感じられるのである。つまり、自己信頼を実践することにより人は強くなるが、そんな強さを得た彼の周りに人々が集まり集団を形成すると、たちまち苦勞して得た強さを失ってしまいかねないということである。自己信頼を実行する際の逆説的な難しさがここにある。しかしそれでもなお、人は自己信頼を維持していくべきなのである。エマソンは次のように「自己信頼」を締めくくっている。

He who knows that power is inborn, that he is weak because he has looked for good out of him and elsewhere, and, so perceiving, throws himself unhesitatingly on his thought, instantly rights himself, stands in the erect position, commands his limbs, works miracles; just as a man who stands on his feet is stronger than a man who stands on his head.

... Nothing can bring you peace but yourself. Nothing can bring you peace but the triumph of principles .

Ⅲ

これまで述べてきたように「自己信頼」でのエマスの主な主張は、我々は余りに集団に埋没してしまっているものであり、そのために人間としての本来の力をすっかり失ってしまっているということ、そしてそれを再び取り戻すためには是非とも自己信頼の態度をとることが必要であるということであった。同じようなテーマについて心理学者のユング (C. G. Jung) は『結合の神秘』の中でルカの福音書17章20節の「神の国は見える形では来ない」という言葉について次のように言っている。

「神の国は見える形では来ない」 Non venit regnum Dei cum observatione (「ルカ福音書」17-20)。「実に、神の国はあなたがたの内にあるのだ」 Ecce enim regnum Dei intra vos est (同17-21)。「あなたがたの内に」 intra vos のものギリシャ語は ἐν τῷ ὑμῶν である。これが近年では「あなたがたの間に」(ドイツ語 unter euch) と翻訳されている。つまり『黄金論説』の著者の言葉に従えば、「人間の、目に見える肉体的な形をとった集いの内に」 in coetu visibili et corporeo hominum の意味に訳されているということである。ここには、人間の内面における結びつきを外面的な共同体 [集合的な結びつき] に置き換えようとする現代的な傾向が露呈している。この傾向はまるで、自分自身との内面的な結びつきを持たないものこそが外面的な結びつきを手にすることができるのだと主張しているかに見える。このような唾棄すべき傾向によって、大衆化は準備されるのである。⁸¹⁾

このようにユングも「内面的な結びつき」の重要性を訴え、さらにそれが軽視されていることを嘆いている。同じように、エマスの主張もこのような傾向への批判であると言える。このような傾向は心の軽視と結びついて生じてきたと言えるが、非常に興味深いのは、同じくエマスのエッセイ「神学部講演」(“The Divinity School Address”)に見られるように、それと同時に宗教もまた弱体化していったという事実である。

次にその内面と人間との関係に話を進めていきたい。エマスの一八三一年十一月二十三日の日記には「内なる神」についての次のような記述がある。

For it is not to be expected that God should gratify any man in an unreasonable request only because he asks it violently, but precisely in proportion as a man comes into conformity with God, he asks right things, or things which God wills, & which therefore are done. And when he is wholly godly or the unfolding God within him has subdued all to himself, then he asks what God wills & nothing else & all his prayers are granted. In this sense the promises of Christ to his disciples may be understood .⁸²⁾

つまり自分の「内なる神」と自我意識の間に意志の相違がなくなったときに、祈りは聞き届けられ、この時この二者は理想的な関係に到達するとエマソンは言っているのである。これと同じような主張は「自己信頼」にも含まれている。その中でエマソンは「祈りとは、人生のいろいろな事実を至高の観点から思いみることだ。それは、じつものを見つめ歓喜に満ちた魂の独白であり、自らの業を良しと宣う神の霊である……人間は、神と一体となると、たちまち物乞いをしなくなる⁸⁸」と言っている。これは少々神秘主義的でさえあるように思われる。そして先程も「自己信頼」の中の記述に関して指摘したのだが、ここにもやはり意識の無意識への埋没という傾向が現れているように思われる。「自己信頼」の主旨は集団から個へという価値の転換の提唱であったが、個が集団に対抗して、そこへ埋没しないためには、やはり個はそれなりに確立されなければならないのではないだろうか。そうなれば、エマソン自身が言ったように、道徳原理のようなものも必要となってくるだろう。そういった個の確立がなされなければ、個は容易に集団に呑み込まれかねないのである。そしてそういったことはあくまで自我意識の役割であり、「自己信頼」ではその役割がかなり過小評価されているきらいは残るように思われる。

エマソンが感じた同時代人の心の弱さ、決して埋めることの出来そうにない空虚感は現代人の多くの心の中にも容易に見てとれそうである。私が思うに、現代ではその当時よりも遥かにその事態は深刻化しているのではないだろうか。そしてそれは現代人に自己信頼の態度が欠けてしまっていることを意味している。実際、このエッセイの主張が現代の我々には少々行き過ぎていてのではないかと感じられるほどに、自己信頼の考え方は馴染みの薄いものになってしまっているように思われる。「信念を持って生きる」ということが現代人の生きる信条となることはあまり考えにくい。それよりも経済原理のほうが遥かに幅をきかせている。人々はあまりに社会に、集団に、妥協しすぎたのではないだろうか。このエッセイの中でエマソンはたびたび自己信頼に欠ける人々に対して厳しい非難をしているが、そういう箇所思わず自らの生き方を考えさせられてしまう現代人は決して少なくはないだろう。

心理学の考え方を少しばかり理解すれば、人間の心の働きというものが極めて正直なものであるということが分かる。まるで算数のように、誤った計算をすれば必ず答えは間違っているし、正しく計算をすれば必ず正しい答えが導き出される。人間がその人生の様々な局面の中で何か誤った行動をすれば、必ずしつぺ返しを食うはずである。エマソンはこのエッセイの中で恐ろしくも極めて重要な指摘を行っていた。自己信頼を失った人々は力を失うのである。「守護神は彼を見捨て」、「彼に味方する詩神はなく、創意も起こらず、希望も湧かない」。

ユングや神話学者のジョセフ・キャンベル (Joseph Campbell) もここでのエマソンと同じような警笛を鳴らした。二人とも神話の喪失が現代人の心に大きな空虚を生み出したことを主張した。ユングによれば、宗教も神話も、人間が意識的に、あるいは無意識的に、心に関する

様々な知恵をそこから得ることの出来るものである。なのに宗教はすっかり脆弱化してしまい、神話もファンタジーでしかなくなってしまった。心は完全に軽視されてしまい、そんな世界にあっては自己信頼さえもグロテスクな考えに見られかねない。しかし心をもっと重視しようではないかというエマスの主張は実はもっともな考えだと私には思われるのである。

エマスはこのエッセイの中でたびたび自己信頼という考え方と神という問題を関係づけて述べているが、どちらも人間の心の本質的な部分に関わることなのでこれは当然のことであると言えよう。先程、私は現代人が心に満たされない思いを抱いており、その空虚感にさいなまれているのは自己信頼の欠如から来ているのではないかと述べたが、もう一度、自己信頼と神との関係を含めてそれについて述べておきたい。人が満たされないのは、実は人がその内なる世界において、もはや自分よりも偉大な、より大きな存在を考えつかなくなってしまったからではないだろうか。いや考えつけなくなってしまったからではないだろうか。外的には、人間には今でも自分にはかなわないものを持っている。自然の驚異は依然として残っているし、自然災害の前では常に人間は自らの無力さを露呈してしまう。しかし内的にはどうだろうか。エマスの「報償」(“Compensation”)ではないが、現代人は物質的な豊かさを得たものの、精神的にはあまりに貧困になってしまっているように思われる。感情はさておいても、思想は極めて貧相な醜態をさらしている。そして先程も言ったように宗教や神話は生きておらず、神は縁遠いものとなっている。かつて神は人間が考えられる限り最も偉大で崇高な存在であった。それが今、無神論的な世界においてその座を明け渡してしまっているのだから、仕方なく人間自身がその位置、「円の中心」、につかざるをえなくなる。しかしながら人間は甚だちっけな弱い存在であり、神たりえないのであるから、どこかに無理がくるに違いない。先程言ったように、心は正直なものであり、曖昧にごまかせるものではない。間違った計算をするときと間違った答えが返ってくるはずである。

「満たされる」という言葉は受動態である。つまり人が「満たされる」ためには自分を満たしてくれる何かが必要なのである。そして自分を満たしてくれるもの、満たすものは、やはり自分より偉大で崇高な存在でなければならないはずである。なぜなら自分よりも卑小なものが自分を満たしてくれるとは思えないからである。常により大きなものがより小さなものを満たすのである。つまり人間がもはや自分よりも偉大なもの、大きなものを見失ったがために、「満たされる」ことがなくなってしまったのではないかと私には思われる。神はかつて人間が考えられる限り最も大きなものであったがゆえに、人は神によって「満たされた」のである。現代人は、宗教、神話の喪失によって「神的リアリティー」を失ってしまった。そしてその代償に、自らの内なる世界に大きな空虚を与えられたのではないだろうか。神がその座を去った今、再び「満たされる」ようになるには、人は自分よりも遥かに偉大なものを自ら見つけだすことが必要になるだろう。

注

- (1) Ralph Waldo Emerson, *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, Ed. Alfred R. Ferguson, Vol. 4, (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1964) 47-48.
- (2) Ralph Waldo Emerson, "Self-Reliance," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, 2nd ed., Vol. 2, Centenary Edition (The Riverside Press, 1903, New York: AMS, 1979) 76-77.
- (3) Emerson, "Self-Reliance," 45.
- (4) Emerson, "Self-Reliance," 46-47.
- (5) Emerson, "Self-Reliance," 49.
- (6) Emerson, "Self-Reliance," 49.
- (7) Emerson, "Self-Reliance," 49.
- (8) Emerson, "Self-Reliance," 50.
- (9) Emerson, "Self-Reliance," 53-54.
- (10) Emerson, *Journals*, Vol. 4, 49-50.
- (11) Emerson, "Self-Reliance," 56-57.
- (12) Emerson, "Self-Reliance," 71.
- (13) Emerson, "Self-Reliance," 78.
- (14) Emerson, "Self-Reliance," 50.
- (15) Emerson, "Self-Reliance," 63-65.
- (16) Emerson, "Self-Reliance," 74-75.
- (17) Emerson, "Self-Reliance," 76.
- (18) Emerson, "Self-Reliance," 89.
- (19) Emerson, "Self-Reliance," 89.
- (20) Emerson, "Self-Reliance," 89-90.
- (21) C.G. ユング著, 池田紘一訳, 『結合の神秘』(人文書院, 1992), 333.
- (22) Emerson, *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, Ed. Alfred R. Ferguson, Vol. 3 (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1964) 308.
- (23) Emerson, "Self-Reliance," 77.

(もちどめ こうじ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程) (1996年10月16日受理)